## 雪の山路

親鸞上人ならねども雪のふる山みちをしみじみと越え申
す雪はこんこん山みちを

## 幼帝

王冠燦爛、日燦爛、涙こぼせばなほ燦爛
王冠にひよいと來てとまる蜻蛉、とんぼ重いか眩しいか
蜻蛉重きにあらねども王冠燦爛、ただ涙



いとしや晝の日なかを小さな銀の王様が泣かしやる
王様の冠がゆらいだと思つたら死なしやつた

## 金

物言はぬ金無垢の彌陀の重さよ

## 煙

煙は寥しやむごともなし立つな煙よ
幽かに煙のもつるるはわが常住の姿なり幽かなれ煙

## 澪

しみじみと澪がわかるる、これがわかれか
光りてながるるみをのすぢ光りてゆらめくみをつくし

## 泳ぎ

寂しければ海中にさんらんと入らうよ
さんらんと飛び込めば海が胸につかえる、泳げば流るる、
力いつぱい踏んばれ巌の上の男



## つまづき

さんらんと蹴つまづいたが痛かつたか木の根
路のべの柳ただ見て過ぎなば過ぎぬべし
われはただ禮拜かしこまる
有難や柳がさんらんと光るわ、そつと根に腰下ろいてさ
てそつと行こかの

## 乾草

秋の野にいづあまりに明るかりければ
乾草に火を點けむぞ、きりぎりすきりぎりす

## 啄木鳥

木が光りゆらめくぞよ、とめどなき啄木鳥

## 秋日小情

妹よそなたにはきこえぬか秋のといきが
ふけゆくものは茶の利休ほのかに座るわがこころ
光る木によぢよ子どもよ寂しくばその光る木をゆすれよ
日もうらら風もうららよ麗らかに落つる木の葉や



眼をあげ百姓枯木に雀がこぼるるぞ

## 卓上

深い溜息がきこえた、はあていまのは誰のといきぞわが
前の眞赤な酒のさかづき
けふも暮るるかあかあかと暮るるか何もせなんだでなう
われもする人もする長ためいきのヴァイオリン
ほのかならずば何かせむ惜め涙よ

純眞無垢の涙こそわれと汝がものヴエルレン

## 蛇の舌

冷たきものは蛇の舌タンゴ踊の眼の光
執念の白蛇死んだ女王の陰に入る、といの
女王はクレオパトラ
悲しや鐘の中の安珍、金の中の眸
蛇も交むか眞實にそのほかはみな嘘ぞかし
ほれほれと女からだまされて見たやの



## 子ども

天眞流露子どもがはねるぞはねるぞ
飛び越せ飛び越せ薔薇の花、子どもよ子どもよ薔薇の花

## 深夜

月ほそく光りたり眞の夜中に、懺悔せよとか
寸金本土の阿彌陀佛光るは海の眞夜中

## 海底

死んで光るものは珊瑚の巣弟アベルが眼の光

カイン怒つて弟アベルを殺すこれ惡のはじめなり

恐らくは花ならむ海の底の海松の小枝に輝く玉あり輝く玉あり



# ほのかなるもの

# ほのかなるもの

ゆめはうつゝにあらざりき、うつゝはゆめよりなほいとし、まほろしよりも甲斐なきはなし。

幽かなるこそすべなけれ、美くしきものみなもろし、さきものはさらにも云はず。

ひとのいのちはいとせめて、日の光こそすべなけれ麗かなるこそなほ果敢なし。星、月、そよかぜ、うす雲のゆくにまかする空なれども。

ふりそゝぐものみなあはれなり、雨、雪、霰、雹に霙、



それさへたちまち消え失せぬ。

土に置く霜、露のたま、靄、霧、霞、宵の稲づま、ほのかなれども水陽炎のそれさへ頼むに足るものなし。

煙こそあはれなれども、捉へられねばよしもなし。山家にゆけど、野にゆけども、水のながれを堰くすべもなや。

ちちろと歎く蛩も、螢の尻もみな幽けし。なまじ寢鳥の寢もやらぬ春のこころの愁はしさよ。

色ならば、利休鼠か、水あさぎ、黄は薄くとも温かければ、卵いろとも人のいふ。

水藻、ヒヤシンスの根、海には薔薇のり、風味あやしき蓴菜は濁りに濁りし沼に咲く、なまじ清水に魚も住ます。

花と云へば、風鈴草、高山の蟲取菫、蒜の花、一輪咲いたが一輪草、二輪咲くのが二輪草、まことの花を知る人もなし。

葉は山椒の葉、アスパロガス。蔓は豌豆、藤かづら。芥子に恨みはなけれども、その葉ゆゑこそ香も青く、ひとに未練はなけれども、思ひ出のみに身はほそる。

あはれなるもの、木の梢。細やかなるもの、竹の枝、菅の根の根のその根のほそ毛、絹絲、うどんげ、人參の髯。



はろかなるもの、山の路。疲れていそぐは秋の鳥、とまるものなき空なればこそ、こがれあこがれわたるなれ。玻璃器のなかの目高さへ、それと知りなば果敢なみやせん。

巣にあるものはその巣をはなれ、住家なきもの家をさがす。栗鼠は野山に日を暮らし、巡禮しばしもとどまらず。殼を負ひたる蝸牛はいつまで殼を負うてゆくらむ。

かへり見らるる船のみち、背後の花火、すれちがひたる麝香連理の草花の籠、ひとの襟あしみなほのかなれ。

笛の音の類、朝立ちの驛路の鈴、訪ふ人もなき隱れ家のべるの釦のほのかに白き、小夜ふけてきくりんのたま。

影はなによりまた寂し。蹄子のかげ、扇のかげ、動く兎の紫のかげ、花瓶のかげ、皿に轉がる林檎のかげはセザンヌ翁をも泣かすらん。

夏はリキュール、日曜の朝麥藁つけて吸ふがよし。熱き紅茶は春のくれ。雪のふる日はアイスクリーム。秋ふけて立つる日本茶、利休ならねどなほさら寂し。

味氣なきは折ふしの移りかはり、祭ののち、時花歌のすぐ廢れゆく。活動寫眞の醉漢の絹帽に鳴くこほろぎ。

さらに冷たきもの、眞珠、鏡、水銀のたま、二枚わかれし蛇の舌、華魁の眸。



しみじみと身に染みるもの、油、香水、痒ゆきところに手のとどく人が梳櫛。こほれ落ちるものは頭垢と涙、湧きいづるものは、泉、乳、虱、接吻のあとの噎び、紅き薔薇の蟲、白蟻。

誤ち易きは、人のみち、算盤の珠。迷ひ易きは、女衒の口、戀のみち、謎、手品、本郷の西片町、ほれほれと惚れてだまされたるかなし。

忘れがたきは薄なさけ。一に好色、二に酒の味、三にさんけの歌枕、わが思ふ人ありやなしやと問ふまでもなし都鳥、忘れな草の忘れられたるなほいとし。

淺くとも清きながれのかきつばた。僞れる、薄く澄ませる、また寂し。まことなきものげに寂し。まことあるもののなほ寂し。しんじつ一人は堪へがたし。人と生れしなほ切なけれ。

思ひまはせばみな切な、貧しきもの、世に疎きもの、哀れなるもの、ひもじきもの、乏しく、寒く、物足りぬ、果敢なく、味氣なく、よりどころなく。

頼みなきもの、捉へがたく表現はしがたく、口にしがたく、聽きわきがたく、忘れ易く、常なく、かよわなるもの、詮ずれば佛ならねどこの世は寂し。

まんまろきもの、輪のごときもの、いつまでも相逢はず



半行ひゆくもの、また廻るもの、はじめなく終りなきもの、煙るもの、消なば消ぬがに縺れゆくものみなあはれ。

藝は永く命みぢかし、とは云ふものの、滅び易きはうき世のならひ。うたも、しらべも、いろどりもまたゆめのまたゆめ。

うつつをゆめともおもはねど。うつつはゆめよりなほ果敢な、悲しければぞなほ果敢な、幻よりもなほ果敢な。

# 白金小景

## 白金の獨樂

感涙ながれ、身は佛、
獨樂は廻れり、指尖に。

かがやく指は天を指し、
極まる獨樂は目に見えず。

圓轉、無念無想界、
白金の獨樂音も澄みわたる。

## 眞言

獨樂の光耀凝視むれば、
大千世界の空の色。

有情輪廻の獨樂なれば、
をりをりかたぶく美くしく。

麗らかなるかな獨樂の心、
赤子も泣き澄む獨樂の冴。

獨樂は耀く、音もなく、
眞言秘密の法の聲。
獨樂の光耀極まれば、
曼陀羅曼珠の華ぞふる。

## 千手の獨樂

ひとつの獨樂の耀(かゞや)けば、
ひとつの心澄みわたる。

ふたつの獨樂の耀けば、
ふたつの心澄みわたる。

七つの獨樂の耀けば、
七つの心澄みわたる。

一百の獨樂耀けば、
一百の心澄みわたる。



一千の獨樂耀けば、
一千の心澄みわたる。

一手は千手、千の獨樂、
千手のなげき彌(いや)盡きず。

さあれ千手の千の獨樂、
思ひつむれば一となる。

一心一手、澄みわたる、
白金の獨樂、一の獨樂。

千年外道(げだう)邪婬界、
一瞬白金、わが涅槃。

## 生命

光りかがやく圓きもの、
あたりまばゆくふりかへる。

光りかがやく圓きもの、
あたりまばゆく目をつぶる。

光りかがやく圓きもの、
光り澄みつつ掌を合す。

## 苦惱禮讃



苦惱は我をして光らしむ、
苦惱はわが靈魂を光らしむ、
わが憎き天上界を光らしむ、
わが一根を光らしむ。
素肌白金、
内心、燦々ラヂウム、
苦惱はわが手の獨樂を、
靈妙音の雪と成す。

## 掌

光りかがやく掌に、
金の佛ぞおはすなれ。

光りかがやく掌に、
はつと思へば佛なし。

光りかがやく掌を、
うちかへしてぞ日もすがら。

## 邪婬戒

御足を吸はせたまへと、
歸命頂禮されたれば、

女來て吸うたれば、
たまらず、われはをののきぬ。



あはれみたまへ、御佛よ、
われは滴しぬ、人間の精のしづくを。

## 婬樂二品

婬樂

婬樂のイルミネエション、
婬樂至上、超善惡、
淨明淨光。

この時、佛、
足のうらより逃げたまふ。

善哉、女や。

佛足

足のうら耀くばかり、
たちまち君が愁を感ず。
麗らかや、寂しさや、足、
白金の刺青の足。

## 白金の唖

我は唖、
思ひつめたる唖、
白金の唖、



唖こそは物も言はれね、
内心燦爛、皆涙。

## 遲羅佛

佛の頭に光るもの、
白金綠光。
天を指し、
一本澄める美くしさ。

なつかしきかな遲羅佛、
摩羅を頭にいただきて、
幽かに、眞如の目をひらく。

## 鳩

鳩うやうやと敬禮し、
嘴ふたつあはせたり。

嘴あはせ、敬禮し、
光りかがやき重なりぬ。

光りかさなり、たちまちに、
白金無垢となりてけるかな。

## 白金交感



鳥獸もろもろの魚介、
すべて皆あるがままに背はしめ、

天體、山嶽、雲、雨、嵐、
又すべてあるがままに薫ぜしめたまへ。

さらに草木の官覺をして、
切なる人間の感傷と交感せしめ、

紅を金に、黑を銀に、
世界一面に白金ラヂウムの地雷を爆發せたまへ。

## 究竟

紅耀(べにかがや)けば、金となり。
黑極まれば、銀となる。
內心の白金の獨樂、
光りつむれば空に入る。



# 現身鈔

# 麗日悸音

一

麗らかに、をののきて、
麗らかに、われひとり、
麗らかに、をののきて。
麗らかに、日もすがら。

二

麗らかや、諦らめながら、
麗らかや、諦らめられず。



三

麗らかや、人間が、
唯ひとり裸とぞなる。
麗らかや、室の中、
たえて音こそなかりつるかも。

四

麗らかや、寂しさや、
麗らかや、裸となりて、
四足の眞似する、ひとり。

五

麗らかや、
出で入る息の、
わがのぞとおもへば、息の。
麗らかや。はれ。

六

麗らかや、ながるる水の、
うつつなや、耀やく水の。
麗らかや、その音の、
その水の。はれ。



# 日光四章

一

兩掌そろへて日の光掬ふ心ぞあはれなる。
掬へど掬へど日の光、
光りこぼるる、音もなく。

二

光り耀やく何物か握りしめむとす、日もすがら。
光り耀やく空中に手を握りしめ、また開き。

三

何か驚き、見廻はせど、
耀やくものは日靈女牟遲。
ふつと洩せしため息をわがものぞとは我知らず。

四

光あふるる蔦かづら、
ゆりうごかすは日の光。
ただ日の光、日のしづく。

## 惡心の時

一

人間をして麗らかに獨あらしめ、時折は。
人間ものは人間の眼おそるる、時折は。

二

光り耀やく大いなる魔羅が御空に見ゆといふ。
狂人のいふことなれば、
氣にもかけねど、麗らかなりや。

三

けふも十方うららかに、
たえて音こそなかりけれ。
惡心きざすまひるとき、
たえて音こそなかりけるかも。

四

かたりと落ちし基督の額。
はつと耀やく、室の中、
またも音こそなかりけるかも。
さんたまりや。

## 戀慕妙諦

ほれほれと見入るその時、
まだ惚れず。
どんと突かれて、はつとなり。



はじめて戀しき涙こぼるる。涙こぼるる。

## 昆蟲成佛三曲

### 一　こほろぎ

一心こそはうれしけれ、
光りつめたるこほろぎは
翅鳴らし、
肢をさすり、
流石ふるへて敬禮し、
遂に雌をば押えたり。
一心こそはうれしけれ、

微妙の音をこほろぎ鳴らす。

二　きりぎりす

草葉につるめるきりぎりす、
絶えて音こそせざりけれ。
耀き耀くきりぎりす、
白金浄土のきりぎりす。

三　蠅

あまりにも麗くしく飛びてつるめば、
愁はしくうち拂ふよすがだになし。
あかるさや、つゆのひぬまの



金蠅のイルミネエション。

## 薔薇の木に

薔薇の木に
薔薇の花さく。
なにごとの不思議なけれど。

## 鳥獸哀歡

一

鳥の鳴く聲ようきこゆ、

然れども、その言葉、
麗らかに交みかねつつ鳴くぞとは、
悲い哉や鳥ならぬ人間ものはよう知らず。

二

鹿の鳴く聲ようきこゆ、
然れども、その心、
思ひかね戀の哀れに鳴くぞとは、
悲い哉や、獣ならぬ人間ものは知らぬなり。

## 笛

笛取り吹けばかがやかに
このもかのもに笛のこゑ。



笛を吹きやめ、聽き澄ます、
たえて音こそなかりけれ。
麗らかなるかな、またしても、
わが笛吹けば笛のこゑ。

## 子ども

子ども泣けども泣くならず、
よろこび極まり泣くなめれ。
十の指を目にあてて
面ふりむけ泣くなめれ。

十の指の間より
透かし見するは天の不二。
十の指の間より
こぼれ落つるは日のしづく。

## 機縁二曲

一

微風きたる、うらうらと、
笹の枯葉を鳴らすなれ。
心ひらきて吾が居れば、



微風きたる、そよそよと。

二

光りかがやく市中に
はつと思へばまひるどき。
深山の奥のその奥に
水のながるる音のきこゆる。

# 十方法界

## かねたたき

光りかがやくものの音
十力世界に滿ちわたる。
草葉に一點、かねたたき
鉦を打つてぞおはしけれ。

## 林檎

ぽんと落ちたる音したり。
十力法界うららかに
眺め廻せど事もなし。
林檎のぽんと落ちた音。

## 水面

光りかがやく水面に
ぽんと落ちたる音したり。
飛沫はねあがり、波光り、
落ちたるもののかげもなし。
飛び込みしもの、ややありて

つらつらと躍りあがる。
まんまろき林檎なりけり。
麗らかや十方法界、
光耀のふかさや。

## 天人墜落

とどろき墜ちたる音すなり。
眼みひらき、聽き入れよ。
大千世界の春の暮、



光りかがやくなにものか、
墜ちてとどろく音こそすなれ。

## 鴉

安心したる聲すなり。
うららかや、木の梢に
周邊見まはす一羽の鴉。
朗らかに鳴く、あまつさへ。

## 魚

光りかがやく天景を
燦爛と魚飛びゆけり。
麗らかや、十方法界、
感極まれば海の魚
須彌大山も飛び越ゆる。
光耀の深さや。

## 鳥



光りかがやく空あひ
疲れていそぐ何の鳥。
大日空にましませば
三千世界に事もなし。
疲れていそぐ何の鳥。

## 煙

光りかがやく海上を
しみじみいそぐうす煙り。
麗かや十方法界、

その煙まだ消えず。
光耀の深さや。

## 蔦

怒に燃えて蔦かづら
ひき拐りつつすすみゆく、
崖一面に蔦光り、
日は燦爛と音もなし。
光耀の深さや、
苦しさや、我。



## 蟲

かかる日に、
蟲となり、
綠青の葉に住む心。
思ひつめたる蟲なれば、
己が身體を點となし、
日の光耀を取らむとす。
麗らかや、十方法界、
光耀の深さや、
蟲はいま

金となる。

## 空

光明遍照無限界、
飛びかける鳥
魚をつかみ、

魚の重さに堪へかねて
飛びかけりつつ落ちむとす。

白金一點、無限界、
その鳥と魚
小さく小さく。



光耀の深さや。

## 風

麗らかや、
限りなくうつくしき海の面を、
安らかに赤子耀き匍ひゆけり。

その赤子聲こそ立てね、
燦爛として、遠く遠く。

麗らかや水平線、
赤子終に

眞白き金となる。
光耀の深さや。

二・六

# 白金の獨樂

## 麗日展望

麗らかや、
見わたせば帆かけ舟、
玲瓏と不二の峯。

## 天の雪

不二の雪天に光り、
十方に愁を放つ。
不二の雪水にうつり、
白金、
水のながれに消えず。



あな、かしこ、
その間を、眞實一路の巡禮、
舟にのり遠く消えゆく。

## 峠

雨ふれば
光る菅笠、
雨ふれば
光るわが足、
濡れ濡れて峠をのぼる。
思ひきや、一天晴れて
不二の雪額に光り、

その雪は、海にも消えず。
瞰下せば麓路の雨、
雨のあし何處をいそぐぞ、
はや清し白金の川のひとすぢ。

## 北齋

一心玲瓏
不二の山。

桶屋籠うつ桶の中に
白金玲瓏
天の雪。



思ひつめたる北齋が、
眞實心ゆゑ、桶の中に
光りつめたる天の不二。

北齋思へば身が痩する。

## 佇立

海まんまんとうねれども、
不二れいろうとおはせども、
佇むものはわれひとり、
こぼるるものはわが涙。

## 汽車

耀かに山峡を
走り出でたる白金の汽車。

海はあかるく、
日はのどか、
泣くに泣かれね。

麗らかや、秋、
洞道出でて、海沿を、
蹂りて小さく
光り匍ひゆく白金の汽車。



泣くに泣かれず、汽車なれば。

## 草木迅走

草木耀き今走る。

麗らかや、草木。
燦爛と消え、また光り、
絶えて音こそせざれども。

寂しからまし草木も、
時はしばしもとどまらず。

坐りつめたる草木の

白金の列飛んでゆく。

## 人

遠き地平の金の星、
星かと見れば、時折に
歩みかがやく金の足。

遠き地平の金の星、
つくづく見れば鍬かつぐ、
さては人かと、涙こぼるる、涙こぼるる。

## やさい



ぎんのさかなのとびはぬる
やさいばたけにきてみれば、
ぎんのさかなをとらへむと、
やさいあはててはをみだす。

## をがは

ながるるみづはいつしんに
ひかりみなぎり、をどりゆく。
いつぽんかかるまるきばし、
うをはそのへをとびこゆる。

## かぜ

かぜふく、きえしかがやきを、
ふきそよがしてひかりゆく、
のはらいちめんかがやかに、
てりかがやかし、わすれゆく。

## ながめ

かがやくものはみなきえぬ、
きえたるものはまたひかる、
ひかり、きえ、
きえ、ひかり、
ひかりつきせず、ひねもす、けふも。



## つなで

ひかりかたまりなきまろび、
をんなこどもはなにすとか、
をんなこどもはつなでひく、
かがやくうみをばひきあぐる。

# 現身鈔

## 罪人

光りかがやく槍ぶすま、
素肌にうけて、身じろがね、
あまりにそそぐ日の光、
あはれみたまへと日をつぶる。

## 野晒

死なむとすればいよいよに
命戀しくなりにけり、
身を野晒になしはてて、
まことの涙いまぞ知る。



人妻ゆゑにひとのみち
汚しはてたるわれなれば、
とめてとまらぬ煩惱の
罪のやみぢにふみまよふ。

## 鏽

身から出た鏽、
しんじつ、
光りつめたる
白金。

## なまじおもへば

なまじおもへばいよいよに
光りつめゆくわがいのち。
いなさ細江のみをつくし
光りつむれば日もつまる。

## 苦しければこそ

苦しければこそ神に縋れ、
戀しければこそ人に縋れ。
きりぎりす草に縋るは、
金色の露のめぐみに。

## 嘘

二人手を取り語ること
皆いちいちに嘘ぞかし。
一人で居てすら、この男
己れと己れをたばかりぬ。

## 自愛

眞實心ゆゑあやまられ、
眞實心ゆゑたばかられる。

しんじつ口惜しとおもへども、
しんじつ此の身が棄てられず。

## 眞實

眞實なりと誰かいふ、
眞實ならずと誰かいふ。
麗らかなれども、また寒く、
水は樋をこそすべるなれ。

## 他と我

二人で居たれどまだ淋し、
一人になつたらなほ淋し、



しんじつ二人は遣瀬なし、
しんじつ一人は堪へがたし。

## ふたつの鏡

いづれが影か、かがやかに、
いづれが眞、えもわかね。
鏡ふたつを照りあはせ、
光りてをののくわがこころ。

## 肖像

あたり眩ゆきわが姿、

ふつと寂しくなる時は、
鏡に影のみのこし置き、
誠の己は飛び去りぬ。

## 幻滅

眞と見しは影なりき、
鏡の中の曼珠沙華、
現身ながら夢なりき、
畫なりけれど夜なりき。

## 現

現に醒めて、麗らかに
物思ふこそうれしけれ。
現身ならで知りがたき
このよろこびを泣きてよろこぶ。

## 凡夫開眼

眼ひらきつくづくと
今日はじめて見奉る。
醜くかりしか、この男、
光りてましかし、この佛。

## 涙

常住不斷のかなしみに
ながるるものはわが涙、
常住不斷のよろこびに、
こぼれ落つるもわが涙。

## 壺二曲

### 一

たれこめて今日もあやしき土くれを
ろくろにかけて、なにすとか、
日ねもすかがやく壺つくり、
たれこめてのみしよんがいな。



### 二

もとより悲しき土のくれ、
たたきつけられ、獨樂となり、
ろくろ廻ればくるくる廻り、
光り極まり壺となる。

## 男と女と

男と女と語らへば
そつと出てゆく女の童、
をかしや、席をはづして
何とするらむ、
男と女はをかしいもの、

といふつもりか、しよんがいな。

## 一偈

こちが云ふこと善く聽けよ、
わたしはおまへに惚れたぞよ。

## ビール樽

ころがせ、ころがせ、ビール樽、
赤い落日のなだら坂、
とめてもとまらぬものならば
ころがせ、ころがせ、ビール樽。



## 金

貧しさに金を借り、
その金が返されず。

きのふもけふも、その金が
燦然と天に光る。

## 貧者

さはさりながら食べずには
生きてゐられず、御佛よ、
生きむがためには蝗でも、

取つて食ぶべし、かがやかに。

## 乞食

乞食默つて手を出せば
頭かがやく、彌陀のごと、
食はずにゐられで食ふ赤茄子、
むべこそ涙も落つるなれ。

## 吉日

女どもに惚れられたらば
うれしかろぞとおもへども、
ふられたらばくやしからむぞ



よしもなやの、けふのよき日なる。

## 巡禮

眞實、諦め、ただひとり、
眞實一路の旅をゆく。
眞實一路の旅なれど、
眞實、鈴ふり、思ひ出す。

# 麗日異抄

# 地雷爆發

ここ青島のかたほとり、
小春日和の日は麗ら。
向うに見ゆるはイルチス砲臺、
ドンドン、バチバチ、日本と獨逸の
戰ごつこの眞最中。

折しもあれや、右手の方から大男の張三、
村から野良へとふらりしよ、
腕の中には馬の糞籠、肩に鍬、
出てまゐつたが玉蜀黍畑。
左の方からこれも同じく肥滿漢の李四、



鋤をかついで、ふらりしよ、
やつてまゐつた出會がしら。
『吃飯了沒有。』
『吃了々々』
一人がやつとここらさと籠を下ろせば
一人がほいきたどつこいとまた鋤下ろし、
ちちんぷんぷん、立ちばなし。
『李爺、今天、野良出る、大事ないか。』
『大事ない。女房長持に入れる、娘かくす、そおれ、豚
佛壇へ押し込む、大事ない。』
『東洋兵、なかなか助平ある、寶盗む、人殺す、平氣あ
る。』
『ブウ、東洋大人仁義ある。女子犯すないよろしいか。』

『東洋兵仁義、女房長持入れる、汝それたいさんをかし
いあるないか。』
『ブウ、それ東洋大人たい、徳國人する事ある。』
『左様あるか、娘汚される、井戸はまる、赤子刺かれる、
それ皆徳國人あるか。』
『ブウ、それ云ふ、ボコペンある。張三。』
『ハッハッハ、東洋大人仁義ある。赤髯助平、ペケペケ。』
『ハッハッハ。』
『ハッハッハッハ。』

『張三、そのの、仕事繁昌あるか。』
『なかなか、馬の糞拾ふ、これなかなかやつとこある。
畑荒される、玉蜀黍もがれる、大根引つこぬく、蠶豆
むちやくちや、弱るあるぞ、全く。』



『左様あるな。南京豆きのふ蒔いた、よろしいか、やつ
と實がつく、踏みにじる、みなペケ、けふ蒔く、明日
またペケ。』
『お芋、人參みなペケあるか。』
『みんなペケペケ、人參大砲の砲彈ぽんと當る、名譽の
戰死ある。ハッハ。』
『ハッハ、東洋兵みな人參ある。』
『ハッハッハ。』
『ハッハッハ。』

呑氣千萬、玉蜀黍畑の眞ん中で、
悠々寛々、何處を風が吹くと云つた風。
馬の糞籠に蠅がいつぱいたからうと、
頭の上に蜻蛉が留つて輪姦しやうと知らぬ顔。

向うの空ではドンドン、パチパチ。
人殺しの砲彈が飛ぶ。

『閑話休題、李四、汝けふ畑鋤くあるか。』
『仕方ない、また鋤く、南京豆植ゑる。みんなペケペケ、よろしい仕方ない。』
『仕方ない、それ莫迦らしい事ある。止めるよろしい。』
『プウ、止める、それたいさん困ることある。南京豆私の命ある、南京豆一日食べぬよろしいか、お腹ペコペコ、私死ぬ、女房死ぬ、娘死ぬ、それ東洋兵みなどろぼうする、ペケペケ。』
『東洋兵わるい、それ云ふボコペンある、戰爭わるい。仕方ない、汝畑鋤く、私一緒に鋤く、汝安心するよろしい。』



『汝、畑鋤いてくれるあるか、それ本當か、多謝々々。』
『畑鋤く、爺何でもない、それよしか。』
と二人がのろくさ、鍬を取るかと思へばなんのこと。
『張三、一寸待つよろしい、私小便するある。』
『ホウ、李四、小便するあるか、私も小便するある、待つよろしい。』
『ハッハッハ。』
『ハッハッハ。』

一人がのそのそ畑の隅こについて立てば、
一人がまた隨いて行つては立ちばなし。
ゆつたりと鈕はづす手もあとやさき。
『今天好天氣呵。』
『很好很好。』

『いい眺望あるな、ホウレ、飛行機が飛んでゆくことある。』

『ホウ、あれ飛行機あるか。』

うつかりぼんと大男空を見あげて小便すれば、
一人も遠い谷間の紅葉見ながら小便すれば、
向うの砲臺、こちらの砲臺、
ドンドンバチバチ、火の戰。

小便すんだらまた畑。

『豆よ、豆、豆、畑の豆よ、
南京豆、豆、豆、
豆蒔け、豆を。』と一人が囃せば、
『豆よ、豆、豆、畑の豆よ、
南京豆、豆、豆、



豆蒔きや、東洋兵が、
びよいと出てほぢくる。』李爺が踊る。
『豆よ、豆、豆、畑の豆よ、
南京豆、豆、豆、
三度に一度は、
食べなきやペコペコ、
生命や物種、南京豆、豆、豆。』

二人そろうて畑を廻り、
唄をうたうたり、轉がつて見たり、
何處まで間抜か、方途が知れない。
そこで二人が、手ばなをかんで、
足で蹴上げて、ぼんと手で受けて、
長い辮髪をくるくる頭に巻きつけて、

それから上衣をおぬぎになり、
兩掌にペッペと唾を吹きかけ、
やつとこどつこい、
また、豆、豆、豆、
南京豆、豆、豆。

やつとこらさと鍬おつ取つて、
さあていよいよ本仕事、
張三、よしか、
李四よ、ほいきた、
一心不亂に向きあつて、
えいや、はつしと拜み打ち。
鍬がかちりと地をうつや否や、
轟然、爆然、大紅蓮、

天地一面、濛々くわいくわい、
鋤鍬ばらばら、馬の糞ばらばら、
豆、豆、豆、豆、
南京豆どころか、
人間二人がめつちやくちや、
飛んでしまへば空はうらうら、口はのどか。

ここ青島のかたほとり、
小春日和の日はうらら、
向うに霞むはイルチス砲臺、
ドンドンバチバチ、日本と獨逸の
人殺しごつこの眞最中。

# 麗空

麗らかな、麗らかな、
何とも彼ともいへぬほど麗らかな
實に實に麗らかな。
瑠璃晴天の空の上。

はるかの下界に雪の連峯。
山はみな鋭角、
白い波を打ち、ますます高く、
眞白に光る、その間から
ひとすぢ煙を吐く山もあり。
その煙までが音たてず。



麗らかな、麗らかれ
何ともかともいへぬ麗らかな、
雲がふはりと空に居る。
實に實にうららかな、
見れば見る程うららかな。

正覺坊が空に居る。
大きな大きなその龜か、
麗らかに飼うてゆくのが眼に眩し。
雪の山をばのり越して、
照り光るまんまるい日輪光にさしかかる
ゆつたりと正覺坊。

麗らかな、麗らかな、
何ともかともいへぬほど麗らかな。
實に實に麗らかな、
るりいろの虚空から、その龜が
ほたりほつたり卵を落し、
何處へゆくのかもわからず、
また乘り越してゆく日輪を。

泣くに泣かれぬ天景に、
正覺坊はいつまでも、いつまでも、
まるい卵をほたりほつたり。
日輪は金になつたり、白くなり。
麗らかな、麗らかな



何ともかともいへぬ麗らかな
實に實にうららかな、
晝の幽靈、正覺坊の尻の穴。

## 牡丹の花を喰ふ親爺

麗らかな、麗らかな、
牡丹畑に來て御座れ。

牡丹畑は音もせず、
うつらうつらと照るばかり。

牡丹に唐獅子、
その唐獅子も音立てず。

ばつくりばつくり、
牡丹と牡丹のまん中で、
牡丹食べ、ひとつ食べ、ふたつ食べ、
眞紅に眞紅に、口をあけたり、閉いだり、
ばくりばつくり。
うちの父さん、氣が狂うた。
麗らかな、麗らかな、
何ともかともいへぬうららかな、
實に實にうららかな、
瑠璃晴天にお日樣は、
見れば見るほど麗らかに。
照れば照るほど、暗くなり。



音もたてねば、聲立てず、
牡丹は牡丹の上に照り、
牡丹は牡丹の下に落ち、
牡丹は牡丹に重なりあつたり、くづれたり。

牡丹に唐獅子、
その唐獅子はここにゐるやらまだ眼が覺めず。
麗らかな、麗らかな、
麗らかなお日樣も、
空いつぱいに圓くなつたり、金になり、
豆のやうになり、暗くなり。

牡丹喰べ、もひとつたべ、
いつまでたつても喰べあきず、
うちの父さん、氣が狂うた。

毛の禿げた、
のつぺらぼうの、
ひとつ眼の、妖怪變化の白眼玉。

## 河童

麗らかな麗らかな、
何ともかともいへぬ麗らかな、
實に實に麗らかな、
瑠璃晴天の日のくれに。



河童がぽつんと立つた、との。

麗らかな漣は漣に、
照り光り、照り光り、いつまでも照り光り、
まだまんまるい月も出ず、暮れもやらず。

惱ましい、何ともかともいへぬ麗らかな、
瑠璃色ぞらの夕あかり、
大河のあちらこちらを漕ぐ舟の
ろかいの音もうつらうつらと消えもやらず。

河童がぽつんと、ただひとり。
はつと思へば、またひとり、
岸にひらりと手をかけて、つららつららと

躍りあがつた河童の子。
頭のお皿も青白く、
眞實、れいろう、素つ裸。
こゑも立てねば音もせず。

河童はそつとうなづきあひ、
葦の葉のそよ風に、
身をふるはし、
よちよちと歩きかねては、またぶをこすり、
もつれあひ、角力とり、角力とり、まろびあひ、
倒れては起き、起きてはころび、
聲も立てねば、音もなく、
れいろうとしてはてしもあらず。



麗らかな、麗らかな、
何ともかともいへぬうららかな、
瑠璃晴天の空あひに、
うかび出て、消えもえやらぬ河童のお皿。
すゝり泣けども人知らず。

麗らかな麗らかな、
逢の連の、照り光り、照り光り、
暮れもあへねば、月も出ず。

いつまであそぶ河童の子。
つららつららと河童の子。

神天にあり

# 春雨の一滴

まだ淺い春さきの光景です。
道化のピエローが泣きながら、白い衣裳を着て、
ぺたぺたと眞白におしろいを塗つてゐると、
やや寒い圓窓の外では
相變らず螢の卵のやうな小雨が降つてゐます。
その雨は枇杷の葉の青い小緣に、
露と凝り、水晶の玉となり、
觀てゐると、それはそれは透きとほり、
まんまろく、まんまろく、しだいに大きく搖れまする。
……
おぎやあ、おぎやあ、おぎやあ。



おやつ、と思ふと、
人間の赤ん坊だ。
萠え立ての甘藍畑に生みつぱなした其儘だ。
母親は誰だかわからぬ。
通りかかつたのはピカピカする絹帽の近眼の紳士で、
それがをかしな手つきで抱きあげる拍子に、
鼻眼鏡をおつことすといふ慌て方。
ひしやげた菜つ葉が跳ねかへると、
赤ん坊は空中で神樣のやうに光ります。
これは基督の再來といふので、連れて歸ると、
早いこと、もう馬に乘つて、華奢な紅天鵞絨の外套で
駈けて行く。
危ない、危ない、露がゆらゆら搖れまする。……

と、いろんな女がせめかけてくる。
赤、青、紫、黄や緑のごちやごちやだ。
やつと風俗壞亂な萬華鏡の喜劇が了ると、
もうよほどの、頭の禿けたお爺さんだ。
薄汚ない酒場から追ひ出されて、
へとへとに死にかかつて突き當ると、お祭の晩だ。
親不孝の小生意氣な息子と洒落めかした賣淫女奴が、
まるで麝香猫のタンゴ踊のやうな足どりだ。
こいつと、樫づくりの洋杖を振りあげると、
それが何時か十字架になつて、
お爺さんもう釘づけだ。
泣いたつて喚いたつておつつかない。
山の下からは血醒ぐさい手槍や刀がピカピカ光つてく



る。
空ではぴいらひらりよと雲雀が啼く。
ところでお祖父さんを賣つた孫どもだ。
彼奴らは不埒のなんの、がつがつした蝗見たいに、
公園の眞紅な薔薇の花の中で、
蒸し立てのパンにジャムをつけて嚙ぢるわ嚙ぢるわ、
それを巡査が來て追ひちらすと、
八卦屋が黒い算木の印をつけた
腐れた牛乳色の天幕を張つて、
そろそろ、ぜい竹をじやがじやが鳴らします。
いよいよ日が暮れかかつた。さあ大變だ。
もういよいよこの世の見をさめだ。
ほろりとしたお爺さん、伸び上ると、
太陽が豆ほどになつて、赤く、豚屋の路次裏へはいり

ます。
お爺さんは夢うつつです。
『婆どのや、おらがの婆どのや。
こゝへ来う、ちよつくら接吻してくんろよ。
ほうれ、屋根裏のあの打球の鞠を知つてるだか、赤と白の。
あれん函の下だがよ、お前と鳴らしたヴアイオリンもあるだ。
さあ、もう一度彈いてくんろ』と、いくら喚いても、
お婆さんは知りません、川で曾孫の赤い襁褓をお洗濯です。
爺さん知らないもんだからおいおい泣き乍ら夢中でえす。
「今宵忍ぶ時や」だ。はあ。



「わしとおまへは。」だ。はあ。
『おつと、お婆さん、待つてくんろ、
あれははあ、何處さ藏つただよお、
ほうれあの綺麗な殿様とお姫様の、あの×さよお。』
露がほとりと落ちました。……

## 貧者の詩

### 一、母の警戒

これは薔薇だよ、いいかい、
これがパンです。
この紅い薔薇を見い見い、
さあさあ、そのパンをお嚙り。

聞て下さい、紅い薔薇でもね、
私の食卓に置いとかなかつたら、
それこそ、私の身上めちやめちやです。

二、あはれな長話

奥様、私はひもじいのです。
まだ晩飯前なのです。
どうぞ止して下さいまし、そんな話は、
この上泣かせられたら、
全く目が眩暈つてしまひます。

## 豚の贈主へ

先週の、七日が七日、
おかげで、私は、豚ばかり食べました。
あなたから頂いた胴切りの奴をね、
朝から晩まで、胃嚢のはぢきれるほど、食べました。
食べても食べても食べきれません。
しまひにはもう悲しくなつて、
涙がほろほろこぼれましたよ。

それかあらぬか、今週は、朝から晩まで、
野菜ばつかり食べてゐます。
全く、もう二三日も續かうものなら、
裏のほうれん草の畑も、
恐らく禿げ上つて了うでせう。

もうもう豚はこりこりです。
私は、それから、トルストイのやうに、
菜食論者になつた、と云ふわけです。あつはつは。

## 厨夫

いいかい、Hors d'Oeuvres だよ
Cuvia だぜ。
夫から Consomé Danicheff だ。
今度は Tai à la victoria だ。
魚だぜ。
さあさあ、ハムだ。
Jambon à la champagne.
お次はよしかね、背肉だぜ、



Filet de Boeuf à la chasseur.
それから、愈、雁の肝だ、
Mosaique de foie gras à la Diplomate.
野菜かい、やれやれ、
choux-fleurs vrofluy だ、
まだまだ、今度が大變だぞ。
七面鳥と菌だ。
Dindonneaux lotis aux Truffes.
さあさあ、菓子だ、Gudau だ。
Charlotte Glace à la Princesse.
水菓子だよ。
チースだよ。
Gruyere にして置くか、
まだまだ、Fruits だ、cafe だ。

やれやれ。

私は惨めな厨夫であります。
自分は食ふや食はずに、はや、
人様の御馳走ばかりこさへてゐるうちに、
もうお腹がいつぱいになつて、
どうにもかうにも歩けません、
おいおい、誰か、お客様の方へ
お料理を持つて行つてくれないか。
私は一寸と、御免蒙つて、
N.G.にまゐります。



# 上天氣

ケケッケッケッ、眞白な雄鷄が、ケケッケ、
茶色の雌鷄に惚れました。
雌鷄は死にさうに、ケケッケッケッケ、
鳴きながら自由にされます。

眞白な雄鷄は、ケケッケ、
ひもじくなつたか、急に、そこらを求食ります。
茶色の雌鷄は、ケケッケ、
刈麥の中へ伏せりました。

卵が生れます……これから、
大丈夫、卵は上等です。

コケッコッコウ……

## 竹林火

畫賛

竹が一本。青笹籔。
竹が一本。青笹籔。
二本の間から、突然、
赤い火がパット燃える、と。

雀が一匹。雀の雄。
雀が一匹。雀の雌。
兩方から、ちゆちゆつ、
こんがらがつて、ちゆちゆつ。



竹が二本で、青笹籔。
雀が二匹よ。雄と雌。
赤い火がふつと消える、と、
竹に雀がお澄まし。

竹が二本で、青笹籔。
雀が二匹よ。雄と雌。
いくら隠したつて、おつつかない。
卵が一つは大丈夫。
明日がお氣の毒ですね。

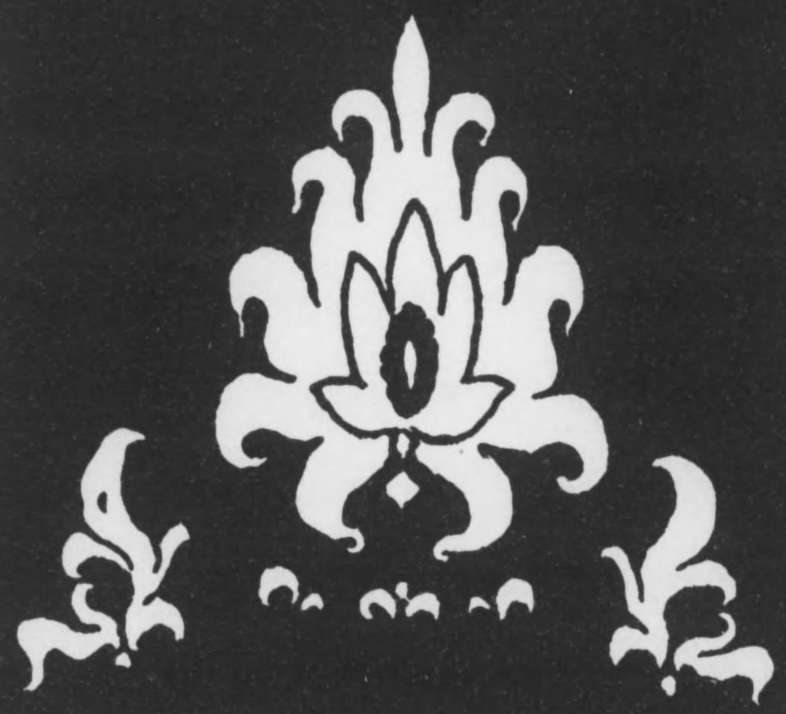
## 風景

「もしもし帽子が落ちましたよ。」
「なる程いい貰だな、フムフム、
この大きなパイプはどうだ。」
「お爺さん犬が帽子を咥えてゆきますよ。」
「諸々、これは素晴らしい景色だぞ。」
「あら、ちよいと、其處は田圃ですよ。」
「やあ、大きな太陽だな、
ゴツホのサイプレスだ、向日葵だ。」
「あれ、其方行つちや大變よ、
川へ陷こつてよ。」
「電信柱も眞赤だぞ、水車も廻つてる、
ほう、これはお誂ひ向きだ。」
「お爺さんてば。」
「いよう、一本橋を誰やらやつて來るな、



おやおや乾草小屋を覗きます。」
「お爺さん——。」
「おや、女が出て來た、や、や、
かぢりつきやがつたな。」
お爺さんは無我夢中、おやつと云ふ間に川の中、
「あら、大變、たうとう陷こつた。」
「有り難い、神様。」

# 畑の祭



# 山景

# 崖の上の麥畠

眞赤なお天道さんが上らつしやる。やつこらさと
蹴を下らすと、ケンケンケンケン……
鶺鴒めが鳴きくさる、
崖の上の麥畠、
天氣は快し、草つ原に露がいつぱいだで、
そこいら中ギラギラしてたまんねえ。
九右衛門さん、麥は上作だんべえ、
蠶豆もはぢきれさうだ。



ええら、いい風だな、沖ぢやまだ眠つてゐるだが、
俺ちの崖の下は眞蒼だ、

——そうれ、また、さらさら、さぶん、さぶん、んん……
尖んがり岩に波がぶつかる、
怖かねえほど靜かぢやねえかよ、
まるで、はあ、鮑の殼見たいにチラチラするだね。
南風が吹きあげる。
やれ、やれ、今日も朝つぱらからむんむんするだぞ。
何でも構うこたねえ、
胸をづんと張りきつてな、うんとかう息を吸ひ込んで見
るだ。
熟れ返つた麥の穗がキンラキラして、
うねつたり、凹んだり、
扁平たく押つかぶさると、
阿魔女でも、何でも、はあ、壓つ倒してやつたくなるだ

あ。

眞赤なお天道さんが燃えあがる、
雲がむくむく燥き出す、
狂ひ出すと――吃驚しただ
畔の仔牛が鳴き出す、
わあといふ聲がする、
村中で穀物を扱き出す、
ぢつとして居らんねえ、
俺ちも豆でも拐るべえ。

赤ちやけた麥と蠶豆、
ぐんぐん押しわけてゆくてえと、
たまんねえだぞ……素つ裸で、



地面にしつかり足をつける、うんと踏んばろ、――
まん圓いお天道さんが六角に尖つて
四方八方眞黃色に光り出す。――
そこで、俺ちも小便をする。

赤ちやけた麥と蠶豆、
ほうれ見ろ、旦那さあが
手に一杯何だか擔げて
讀んで行かつしやるだ、旦那さあ、
大けえ新聞だね、東京の新聞けえ、
紙がぷんぷん匂ふだ。

おやあ、蟬が鳴いてるだな、
どうしただか、これ、ふんとに奇異だぞ、

熟れ返つた麥ん中で眞面目くさつて鳴いてるだ、
あつはつはつ……これ、ふんとに不思議だぞ、
何んでも、はあ、地面にかぢりついて
一生懸命に鳴いてるだ。

夏が來ただな、夏が來ただな、
海から山から夏が來ただな。

あつはつはつはつ……
あつはつはつはつ……

## 崖の下の蠶豆畑

眞赤なお天道さんが沈まつしやる……それだのにまだ、



紅雀が鳴きしきる。
蟬く崖の上の麥畠、
くわつと燃え立つ杉の木、松の木、朱欒の木。
うねつた坂から、
刈穂を背負つた大きな火の玉男がをどつてゆく。
やつこらさ、やつこらさ。……

俺ちが畑は窪地の日かげ、
薄暗い三角畑のゆきつまり、
夜が明けても、日が暮れても、陰氣な畑。
辣韮と蠶豆と、
ずり落ちた崖土に、無性矢鱈に甸ひ廻つたお薯の蔓、
地がじめ〳〵、風がじめ〳〵、
たまさか、眞黄色に照り反す

大船の帆は見えても、
海も見えずよ、
愬ひ、波の音ばかりが
ぐわうと空つ腹を搔き廻す、
俺ちの畑は窪地の日かげ。

眞赤なお天道さんが沈まつしやるだに、
いつまで、そん中で拷つてるだ。
重い暗い蠶豆、
影のふかい蠶豆、
蠶豆が汝か、さういふ俺ちが蠶豆か、
はや、譯がわかんねえ。
日が暮れるだあに、何時まで啞になつてるだ。



影のふかい蠶豆、
青臭い蠶豆、
蠶豆に觸れば、
睾丸の下から、リリリリ……
鈴蟲が鳴きしきる。
やれ、痛や、勿體なや、
思はず拜めば、溜んねえで、
涙がながるる、
ええ、畜生め、
なけなしの靈魂づらまでが
光るやうだぞい、蠶豆。

青臭い蠶豆、
鬱陶しい蠶豆。

日が暮れるだあに、
いつまで拐つても拐りきれぬ蠶豆、
蠶豆は三段歩、
俺ちの畑で、
俺ちが蒔いて、育てて、
肥やしたのによ、
何が鬱ぐことのあるべえ、
寂しいか、切ねえか、
譯はわかんねえだが、涙がながるる。
小便でもしてけつかれ。

眞赤なお天道さんが沈まつしやる……三崎の丘から
海のどん底まで鐘がごうんと落つこちる。
くわつと燃え立つ杉の木、松の木、朱欒の木。



麥が煽つて照りかへすと、
火のやうな裸馬が、
や、や、や、や、手綱を振りもぎつて崖の上を飛んでゆく、
怪我はしねいか權作さん。
大丈夫だ、大丈夫だ、大丈夫だ。

## お婆らが登つてゆく路

暗い坂から坂の頂邊を見れば、
「臺」の空火事じや、野は火事じや。
山の段々畑みな火事じや。
やつこらさつさ、やつこらさ。
白髪のお婆らがやつこらさ。

もう日が暮れるぞ、危ないぞ、
石ころ坂ののぼり坂、
木の葉はきらめく、麓は眞つ闇、
時雨はさんざと、
崖土やこぼれる、やつこらさ。

栗鼠の眼が光るぞ、
暗い坂、のぼり坂、山葡萄どろの實が熟れた。
涙垂らすな、お勘婆、
やれ、汝も尻拭け、お時婆、
慾ばれ、氣ばれ、白髪染塗れ、お熊婆。

やれ、上見りや限りやなし、下見りや限りやなし、



諦めさんせの、因果なもんだよ、
泣いても焦れても、死ちたらお陀佛、
やつこらさつさ、やつこらさ、
長命や爲まいぞ地獄の夕燒。

天竺は火事じや、世は火事じや、
俺らが一生はなほ火事じや、
やれ、もひとつくだれ、下り坂、
やれ、もひとつあがれ、上り坂、
やつこらさつさ、やつこらさ。

くわつと出た、畑に出た、
栗穗が眞赤に。麓の女郎屋にや灯がついた。
畑道やうねり道

こほろぎはこほろころ、
やつこらさつさ、やつこらさ、

やれ、蜻蛉が飛んだ、火が飛んだ。
電信柱に燃えついた。
お蕃はころげる。畑ぢや逃げ出す、
追つかけて取つちめろ、お婆も好きだよ、お若いの。
ふはつはつは、いつひつひ。

天竺は火事じや、世は火事じや、
長命や、耻かい、地獄の夕焼、
やれ、もひとつくだれ、下り坂
やれ、もひとつあがれ、上り坂
やつこらさつさ、やつこらさ。



## 丘の三角畑

鍬打つ、鍬打つ、
裸で鍬打つ、
空は圓天井、
地面は三角、
光は薔薇いろ、藍いろ、利休茶。

鍬打つ、鍬打つ、
並んで鍬打つ。
とべらの木は山形、
反射は三角、
光は銀いろ、薔薇いろ、灰いろ。

鍬打つ、鍬打つ。
離れて彼方此方、
默つて鍬打つ、
向うにライ麥、こちらに人參。
光は利休茶、緣に、金色。

鍬打つ、鍬打つ、
うしろむきに鍬打つ、
一心に鍬打つ、
打たずにやゐられぬ、
とべらの木の周圍を廻つて鍬打つ。
光は薔薇いろ、空いろ、利休茶。



鍬打つ、鍬打つ、
近寄つて鍬打つ、
キラキラするのは巡査のサアベル。
畑の上では蒸汽が旗振る。
光は薔薇いろ、灣内や眞青。

鍬打つ、鍬打つ、
振りかへつて鍬打つ、
とべらの木の下ではあかんぼがすやすや。
鷄がコケッコッコ。
光は薔薇いろ、藍いろ、利休茶。

鍬打つ、鍬打つ、
向きあつて鍬打つ、

拜んで鐵打つ、
打たずにやゐられぬ、心から鐵打つ。
光は薔薇いろ、向日葵、金色。
ぎあとあがんぼが啼き出した。

## 道路

道路が朱のやうに蜒つてゆく。
南は高い粟畑、
重く垂れ下つた穂波がしみじみ、
雉猫の尻尾を振る、
無數に寂しく、熱く。



道路は照りかへる。
一方は午蒡、人參、里芋畑、
爽かな野菜がぶんぶん、
地から畝から眞つ青だ。
こほろぎも鳴く。……

田舍だね、鐵をかついで、
四角な西洋館のかげから
大きな百姓の姿が躍つて來る、
顏から胸までうつぴろげて
輝く秋の空をふり仰ぐ。『今日は』

もう日が暮れるのだ、老年の異人さんが
白いヘルメットに、氣がるな紺背廣の

太つ腹を突き出して、
向ふの松林を過ぎつてゆく、
犬が二匹火の玉見たいに飛んでゆく。

百舌が鳴く、くるい、くるい、くるい、りりり……
まん圓い眞赤な太陽が、今、
蜒つて上つた段々畑の珊瑚樹に
くわつと燃えあがる、——
海には帆が光る、光る、光る。

朱のやうな道路が躍つてゆく、
丘から丘へ、谷から畑へ、
まるで、人間なら泥醉漢だ。
それでも、しんから蹌く一本路、



野菜がぷんぷん、栗がそよそよ。
日が愈々暮れてゆくのだ、怪しい馬糞には、
絹灑の餘光が反り、
露が早やしんみりと草つ葉をよぢのぼる。
而して崖の暗いかづらに、
玉蟲がぢつと、來て留つた、凄いほど美しい凝視。

## 崖

崖は稍倦みそめぬ、蔦かづらの
厚く青き悲みは滿ち傾きぬ。
光は十力無碍に欺きつつ、まづ、
最上層の大きなる葉にふりそそぐ。

葉は今驚く、光の重みに堪へかねつつ、
下なる圓葉に照り傾く、その光
滾れもあへず、下葉の面をゆり動かせば、
その次の葉は更に強く、光り、且つ、搖れくつがへる、
葉より葉へ、かづらみながら
ただ燦爛と流るる如く、躍る如く。

その間も、銀の輪を畫くもの
空に響く、何ともわかず、
麗らかに甘く、くるしく、濕氣さへ帶びて、
その輪は次第に一點に縮まらんとす。
靜けさや、かづらの葉、
光は溢れつくして、また元のままに落ちつけば、



數しれぬ鈴なりの葉もまた靜まる。
時に輪は點となり、うつくしき蟲となり、
光りつつ、熟視めつつ、
その中の青く青く最も厚く
光澤ふかき葉の中心にぢつと留まる。
微妙端嚴の綠玉。
正午すこし前
蟲はいま金となる。

## 馬

不思議なる夕かな、その光は、
高く、熱く、遠近を染め、

そして幽かに、
今し、思ひがけなき坂の上に
虔ましき馬を立たす。

馬は光る珊瑚樹と
照りかへる村の間に見ゆ。
小さく赤く、
をりをりに耀くは息つけるにか。
馬は動く、いつくしく。
静かなり、ただ遙かなり。
なにものの響をか、その中に
馬は靈かたむけて聽入る如し、
金色に閃めくはその智慧か、
馬は赤く休らひぬ。



その時雲間より、
大きなる日輪半ば現はれ
遜だる馬の上に虹ふりそそぐ。
赤き赤き赤金光。
あなあはれ、馬は焔となる。

畏くもうつくしき夕かな、悲しき馬は
微妙端嚴なるその馬は
見るまに不淨の五體より光を放ち
佛の如き眩ゆさにしばしわななく。
南無馬頭觀世音、頓生菩提。
馬は赤く浮びあがる。

何たる法悦。馬は燦爛と天へ昇る。

## 秋の麝香

秋なり、豊かなる、　掻きわけ難きかなしみは
草と金の毛茸と、
もろもろの悪の麝香にぞ醸さるる。

こは路傍なり、猫眼石の奢りかがやく
夕暮の崖の下なり、
熱くちらばる花の中に、流石女の
稚けなけれどなまめかしく、而も無心に、
童は薔薇色薄きシャツをかきあげつる、



尻も眞白く、
病める、悲しき、取りみだしたるその溜息。

大きなる朱の太陽は空にかがやく。
凡ては歡き、小躍りし、光り、驚き、飛び去れり、
さて芳ばしく鳴り響く、子供ごころに。

その兒はこの時、叢に顔さしあてつ、
ただ一心にさしのぞく、
美くしき譬へおたなき恍惚の奥の香りを。

挑むは季節、觸るるは鋭き草の尖、
沈まむとする太陽光はますます赤く。
童が髪に燃えつきて佛の如く透徹らしい、

またしばし、輝かす、ふくらかに臀部の圓みの
滑りよく、白く、冷たき肉づきを、銀のうぶ毛を、

## 墓

墓場は輝く、何かを感ず。
墓場は銀光燦爛たり。

秋なり、絶えず微風はきたる、
麗はしき息の如く。

墓場は銀光燦爛たり。
冷やかに、よろこばしく。

草は光り、跳ねあがる、
一心の彈機。

墓場は銀光燦爛たり、
驚きは擯がる。

そが中にただひとつ、飛び跳ぬるもの、
そは誰が愛せし白猫ぞや。

戸ましき一時、墓場は何かを感ず、
墓場は銀光燦爛たり。

## 鮪

鰌はいま赫耀燦爛たる光に住む。
鰌のをどるは苦しきなり。
耀く沼は彼らを一團の焔と縮む。
深く燃え立つ悲哀は彼らを援す。

鰌はをどれり、葦はそよがず、
ただ朱の太陽圓く閃めく。
鰌のをどるは苦しきなり、
耀く沼は彼らを一團の焔と縮む。

黑く、いみじき力重なる。
泥沼はこれ金銀瑠璃
悪の驕奢は言葉なくして
幻想界に身をうねらす。



鰌は一時に相つるむ、如何なる波も
狂へる彼らを離すことなし、
歡樂あまらば彼らはおのづと解けむ。
鰌のをどるは一心なり。

鰌の五感は鳴り響けり、
彼らは粗野なり、眞に驚く、
鰌のをどるは苦しきなり、
彼いま燦爛かくやくたる光に飛ぶ。

## 遠樹

遠樹は金の甲なり、

明るけれども影ふかく
高きにゐれども眼に低し、
ただ秋風ぞ彼を吹く。

遠樹にかゝる三日の月、
遠樹にのこる晝の雨、
遠樹の暮れてかゞやくは、
かうかうとしてかつ寂し。

遠樹のかげをゆく人は、
身も金色に光るらん、
遠樹の雨を眺むれば、
幽けき煙、野にぞ泌む。



遠樹の上にちらばるは、
これ釣舟の銀の櫂、
消ゆかにしてはまたいくつ、
光りて鳥も飛びゆけり。

遠樹にかかる三日の月、
遠樹にのこる晝の雨、
遠樹の空にわだつみの、
波かぎりなくうちつゞく。

遠樹の赤さ、野の暗さ、
かうかうと吹く秋の風。
遠望の中かげゆれて、
祈るがごとし、いつくしく。

遠樹は遂に遠樹なり、
明るけれどもゆめふかく、
高きに動(ゆら)けどなほ重し、
遠樹の背(せ)にぞ虹(にじ)かかる。



# 海光

# 城ケ島の落日

太陽が落ちかゝつた。大きな大きな大火輪が、炎々と思ひあまつて廻轉する。

雲は微塵氣も無いが、虛空にはたゞ、渦まく黃金色の光ばかりが響き廻る。

その下に眞碧な海が波うつ。輝き返る。

無窮に無邊際に、圓く圓く遙かに。

さく〳〵、さく〳〵、閑寂するとまた、

さく〳〵、さく〳〵、……

山の下では一心に誰かゞ草を刈つてゆく。

波の音にもうち消されないで、その音が



四邊に響き返る、さく〳〵、……

刈らずにゐられないで刈る、鎌が

觸りさへすれば火が出さうに動いてゆく。

夕方だし、外に人間はゐないし、全く

心の底から、力いつぱいに動いてゆく。さく〳〵……

『風だね、まるで海がならした地面のやうだ。

こんな上天氣はこの城ケ島にも滅多に無え。

彼岸だといふのに、暑いことはこれ、

腕も兩足も汗でびつしよりだ。

やあ、えゝら、大かいお天道さんだなあ、

何の事、まるで朱盆をぶん廻すやうだぞ。』

男が網小屋の横から手を翳す、と海には

鵜の鳥が數百羽、

雌鳥を追つかけて一直線に翔けてゆく、
たちまち、朱の波の間に吸はれる。
くわつと四方八方が明るくなる。

不思議な日だ。たつた舟が一つ、
前面を一心に漕いでゆく。波が飛沫をあげる。
大きな大きな人間が　金色に浮きあがる。と、
くつきりと黒く、
遙かに目路から細い岬が尖りだす。
日輪が廻る、廻る、廻る、恐そろしいほど眞赤な太陽が
今こそ心の心から輝く。三つ四つ五つ、
二十、三十、五十、
はては空いつぱいに飛び廻る眞蒼な太陽の幻覺。
海を見れば海にも團々。

山を振りかへれば山には更に綠色の大火輪が團々、閃々、
輝く草の傾斜を轉がり廻る。何たる壯觀。

男はやつこらさと、刈草を脊負つた。
幻覺が納まると、朱紅のやうに
落つきかへつた太陽がまん圓く、平べつたく、
大きく大きく、伊豆の岬へ落ちる。
今まで輝き狂つてゐた空の下から
在る可き山が在る可き處に確乎と姿を曳きはへる、
太陽が紅く〳〵、その向ふには入つてゆく。……
悲しい悲しい底光の赤金光、
三角の頂點。

波が一時に騷めいて渚に寄せる。……

而して何時かしら何かを計畫むでゐたある力が
周圍から暗く、鼠色に歴し寄せる。
灰と赤の鋸のギザ〳〵雲が一線、
遠い岬に曳きはへる、と、餘光の火焔が
更にパッと虚空の八方に反射する。
『愈々沈まつしやつたゞ、南無阿彌陀佛。』
男が丘の上へ登りきつて了ふと、
今まで目にも見えなかつた沖の小舟が、
黒胡麻のやうにチラ〳〵、チラ〳〵、
遙かに一列綴られてゆく、千も萬も、幽かに幽かに、
―生活むきが立たねば、夜も遲くまで、
泣いて鳥賊つる、その舟の火の、やゝありて、イルミネエ
ション。



## 新月

斷崖の松の木に
月ほそくかゝりたり、
ほそき月、
金無垢の月。

入海の波間にも
また、月はしづきゆく
沈々と
金の鉤。

金無垢のするどさよ、

絹灑の雨ののち、
しんじつに
走りいづるその蒼さ。

島黑く、海黑き
眞の闇、
舟ひとつすゝみゆく、
そのうへにほそき月。

なにかわかね、
魚族は目をさまし、
鈴蟲は一心に鳴きしきる。
虔の極まり。



闇の夜は斷崖も、松の木も、
かげわかず、ゆく舟も見えわかず、
ただ光るほそき月、
金無垢のほそき月。

## 鰻

金光燦爛たる夜の海のほとり、
虔ましき胸壁の中、いと暗き芝生のあたり、
鰻はめざめつ、囚はれの身より逃れて
今こそ動け、幽かなる聲の聲、響の響。

空には金無垢のほそき新月、
大きなる銀星連れて走りゆく、氣も澄むばかり、

その時鰻は轉び出づ、鰻ならでは
そのうれしさを誰か知らむ、鰻はすべる。

鰻のすべるは蛇のすべるに異ならねど、
こはもと海のものなれば、陸には馴れず、
凡て寂しく、痛々しく、草につまづき、
闇に燃え立つくれなゐの花にからまる。

鰻はさあれ一心にゆり動く、驚喜のあまり、
花より花をすりぬけつ、泣かむばかりに、
現はれ欺けばをりをり金の鰻となり、
をりをり消えては草葉の露をこぼす。

深く深く、現世に命あり叡智あるもの、



皆眞に光りいづべき緣あり、ただの鰻も
ここに萬歡極まりて涙を落す。
この時彼方に燦爛とかがやくは大海の波。

靜けさや、壯嚴微妙の夜の鰻、
彼こそは實に光り滾るる力の電池、
渾身これ滑りながるる精靈の姿そのまま、
闇を飛び越え、また、燃え立つくれなゐの花を飛び超ゆ。

## 雨中小景

雨はふる、ふる雨の霞がくれに
ひとすぢの煙立つ、誰が生活ぞ
銀鼠にからみゆく古代紫、

その空に城ヶ島近く横たふ。

なべてみな空なりや、海の面に
輪をかくは水脈のすぢ、あるは離れて
しみじみと泣きわかれゆく、
その上にあるかなきふる雨の脚。

遙なる岬には波もしぶけど、
絹漉の雨の中、蜑小舟ゆたにたゆたふ。
棹あげてかぢめ採りゐる
北齊の蓑と笠、中にかすみて
一心に網うつは安からぬけふ日の惑ひ。

さるにてもうれしきは浮世なりけり。



雨の中、をりをりに雲を透かして
さ緣に投げかくる金の光は
また雨に忍び入る。音には刻めど
絕えて影せぬ鶺鴒のこゑをたよりに。

## 波

波は高くうねる、をりをり。
疊つた燻銀の中から
金の瞳をちらつかす。
可憐に、寂しく。

白い太陽が
海の空にある。

限りもない波は波のうへに重なり、
光は光のうへに暗く、
倦怠と愁が重なる。

ゆるく吹いてくる風にも、
恍惚と、
悩ましいものがある。
人間のえしらぬ匂が。

波がなだれる、無數の
女が仰向になる、
ふくらかな胸が白く
幅いつぱい反りあがる、と、そろつて
うしろへなだれる、



股が浮く、蹠が
金いろにちらつく。

いつまでもいつまでも、
波は波に重なり、
光は光に重なる、
陰影の上に暗く。

波は高くうねる、をりをり
曇つた燻銀の中から
金の蹠をちらつかす、
可憐に、寂しく。

## 海雀

海雀、海雀、
銀の點點、海雀、
波ゆりくればゆりあげて、
波ひきゆけばかけ失する、
海雀、海雀、
銀の點點、海雀。

## 海景

帆が辷る、その數が凡そ七八十、
はじめ白く、閃閃と黄色く、赤く、
晴れわたつた大海の眞中に



帆が辷る、自然と一つの輪が出來る。
何時か、大きな帆の女王を中心に
遂に白く白く旋轉する。
その上に日光の五色の反射。

帆が辷る、遙かの鋸形の連山から、空には、
薔薇いろの霞が流れこみ、夏の雲が、
むくむくと銀と灰とに湧きあがる。
帆が辷る、だんだん沖の方へ走つてゆく、

帆が辷る、無窮に、無邊際に。
藍碧の圓い海が擴がる。
その間を帆が走る、輪を作つて、一齊に、
獨樂のやうに廻り出す。

何らかの力が底から加はる。

帆が廻る、廻るうちに、帆の側面が
何か強い力で内に引かれる……、波が時時、
思ひあまつて飛沫をあげる。
而も日中、晴れわたつた壯嚴微妙の海に、
一心に帆が廻る。光と輪との舞踏。

帆が辷る、何處へゆくのか、辷つてゆく。
恐ろしい力で辷つて行く。
密集し、旋轉し、
離れ去らむとし
今や今や廻り澄まうとして
言葉も、色も、光も、



感極まつた靈の法悦。

帆が辷る、何處へゆくのか、辷つてゆく、
恐ろしい力で辷つてゆく。

## 油壺

燦爛と世界が光る、さうして
深く默した油壺の入江に
青い銀の笑がはぢぎれると、また
漣は心の底から
岸邊の小舟をうちゆるがす。
いつまでもいつまでもゆるがす、
不變にうつくしく。

あつ、はつ、はつ、は、
あつ、はつ、はつ、は。

ただ寂然と、無言の
大きな笑が空に傳はる。……
其處には白金の日輪が小さく
ただ光つて廻るばかし、
時折、微風が翼をかへして
雪のやうに散亂する。
いつまでもいつまでもあるかなく、
いつまでもうつくしく。

裸の子供も心の底から



あづけた身體をうちゆるがす、
たつた、ひとり。纜つた舟から
辷りかかつた櫓櫂が波を搖ぐる、
いつまでもいつまでも搖ぐる、
不變にうつくしく。

あつ、はつ、はつ、は、
あつ、はつ、はつ、は。

何處かで環が鳴る、
岸と舟とを纜つた綱が、
何かの環をひつぱるのだ。
心がゆらげばゆらぐほど、
小舟がゆらげばゆらぐほど、

環が鳴る、何かしら鳴る。
いつまでもいつまでもたよりなく、
何かしらうつくしく。

あつ、はつ、はつ、は、
あつ、はつ、はつ、は。

蓮は心の底から
子供の小舟をうちゆるがす。
頭の上には暗い大きな松が
むかしのむかしの話をする。
その松には鳥がゐる。
いつまでもいつまでもうつくしく、
たつた一羽、うつくしく。



あつ、はつ、はつ、は、
あつ、はつ、はつ、は。

小舟がゆらげばお臍がゆらぐ、
お臍がゆらげば小舟がゆらぐ、
いつまでもいつまでも恐ろしく、
いつまでもただ一人。

子供はふいと泣き出した、
聲を放つて。……

## 銃獵

燦爛と海は今光りかがやく、
何ものぞ、空を飛び翔るは、
ただ、これ一面のうねりなり、泣くによしなき
銀の油の溶け合はむ、照り反さんと狂ふのみ。

凡ては眩し、痛々し、笑ふよしなし、
小船は動き、輪に廻り、また一線に歎けども
落ちつかむ、狙ひ射たむとぞ燥れども、
照星は照尺を超え、
銀の櫓櫂は日輪光に欺かる。

光りかがやく何物かまた飛びめぐる、
雲母摺なる空高く、また、低く、
恐怖は銀の翼より響を擴げ、



聲なき舟は一心に波に燦めく。

銃音響く、彈丸は光れり、——
快き手ごたへは空に驚く、
耀は矢と飛び下る。
擾亂は水面に起つ。

凡ては眩し、痛々し、笑ふよしなし、
傷ける鳥と狂へる舟は
燦爛赫耀、
今こそ互に相憎め、言葉なき言葉激しく、
さてしばし、
深くひそめる鳥はまた飛び去らむとし、
たちまちに眼をつらぬかる。

# 消防整列

玲瓏たり、燦爛たり、不盡の山、
麗らや大海はるかに辷りあがる。

消防渚に整列し、
まづ不盡山に一禮す。

纒は金的、梯子は青竹、
てつぺん玲瓏、人間さんらん、
はつと逆さで大の字形。

耀く人數はかたまりころけて



しみじみ喞筒をうち動かす。
喞筒は一臺、一念、一向
喞筒の水はりうりうたり
玲瓏たり、さんらんたり、不盡の山、
喞筒の筒口りうりうたり。

水はひとすぢ、眞實一心、
專ら目的は不盡の山、
彈き飛ばした、ぶん流せ。
よしか、それきた、
動かす喞筒は飛び切り上等。
りうりうたり、さんらんたり。

驚き飛び立つ千鳥と鷗。

それ、雪がけし飛ぶ、
愈靈山が流れるぞ。
玲瓏たり燦爛たり、相模灘、
もう一息だぞ、えんやらえんや。

眞實一念、十方玲瓏、
喞筒の水はりうりうたり、
れいろうたり、さんらんたり、
えんやらえんや、えんやらえんや、

消防整列、一心一向、
消えて失くなれ不盡の山、やあれ、やあれ、えんやらな。……



## 灣光

鹽は數知れず光に動く。
鹽の上には子供座れり、
裸の子供は腕をひろげて
鹽を廻す。晴れわたる海の面に。

正午なり、深くひそめる
精靈の醒めゆく時なり、
銀星は空にあらはれ、
麗はしき人ごゑは灣にあつまる。

鹽はしづかに迅さを增す。

盥は光れり、獨樂のごとく、
一齊に、燦爛たるその飛沫。

夏なり、碧瑠璃の海は
圓く、綠の崖をうつす、
天心にかゞやくは、一の日輪。

その時ふと、笑ごゑは中より起る。
大きく大きく、笑ひくづるゝ純眞。

## 生洲

大きなる月は

小笠原にて



まんまろく轉び出でたり、
護謨の葉は豐かに動く。
いざや歩まん、二人して。

生洲には瑠璃のさゞなみ、
ゆれゆれて金の輪となる、
ああいまし、
麗くしき玳瑁の雄は
雌の上にそつと重なる。

靜かなれ、深く潛めかし、
月はいま蒼き暈きる、
磯煙草みどりにゆらぐ。
ああ、しばし

玳瑁は幸福に住む。

聲もなし、さあれ、うつくし、
何物か、光りとろけて
靈をゆするがごとし、
玳瑁はふたつ重なる。
護謨の葉は豐かに動く。
いざや眠むらん、二人して。



# 雜　　謠

# 畑の祭

大正二年九月某日、相州三崎は諸磯神明宮祭禮當日の事、上層に人形、下段にお囃子の一座を乘せた一臺の山車は漁師と百姓とを兼ねた素朴な村人の手に曳かれてゆく。先づその山車は錄倉街道から横にそれて、一小岬の突鼻の神明宮まで、黍畑や粟畑の高い丘道をうねつてゆく。而も日中、日は天心にかかつてゐる。徑は緩い傾斜を登つたり下りたりしてゆく。崖の高みを行くのでその兩方に眞碧な海が見える。徑が山車の幅より狹い位なので、松や密柑にぶつかつたり何かする。而して畑の上でも何でも構はず曳いてゆく。ぶつつかる時は人形の背後に居る奴が高い處からぼきぼきと松の枝でも木槿でも手當り次第にへし折つたり、押し曲げたりする。馬鈴薯は馬鹿囃子に浮かれて大喜びだが、立樹は可哀想だ。山車が進んでゆくと、そこから



神明宮と相對した油壺の入江が見え、向ふの丘の上に破れかかつた和蘭風の風車が見えてくる。その下に大學の臨海實驗所の白い瀟洒のある洋館がある。芝生が見えキミガヨランが見え、短艇が二三艘浮いて見える。まるで南伊太利あたりの風景にでも接するやうである。愈丘の畑をすべり下りると平たい、かつと明るい渚に出る。右も左も渚である。ここに神明宮の鳥居がある。それから回い穏かな丘の登り道になつて、その向ふが愈海になつてゐる。社前の渚には漁船が幾艘も引揚げてある。その間であかい西瓜店や何かが出る。ここで山車を休まして、一同は赤々と日が暮れるまで盛んに醉つぱらつて踊つたり唄つたりする。中には白痴もゐるし、飄輕者もゐる。萬祝衣きた大禿頭もゐる。而してここの神主は平素は三崎遊廓の檢徴のお醫者である。凡てが如何にも馬鈴薯式なので村の祭とか田舍とか云つたりするより却て「畑の祭」とした方が適當かも知れない。この俗謠調はその山車のお囃子として作つて見たのである。